

*The Circle of Care ;
Legacy of a Pediatric
Clinic (2nd)*

登場人物

A先生		B先生	
28歳	68歳	30歳	70歳
			
ハズの急死に伴い病児保育Aクリニックの現院長就任、「ここから連れ出して」と言って、大学の先輩B先生にメールを送信		Aクリニックの診療のメインを担当、学生時代から、実はA先生にかなり惚れている	

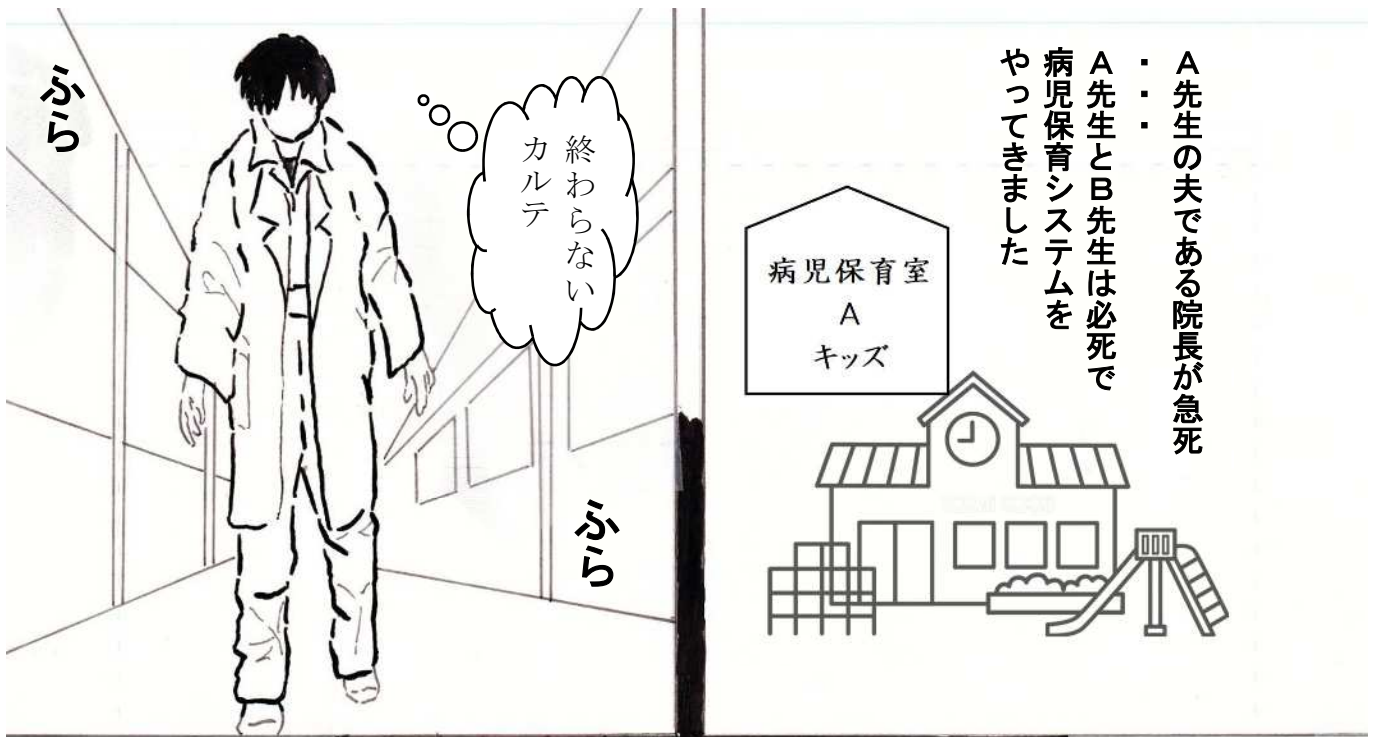
Y事務部長		Z看護部長	Gさん
25歳	65歳	28歳	30歳
			
B先生の妻、実質的な経営者 医師として期待しているB先生をスカウト B先生のA先生への思いは理解		ナースのトップ、心配性	元患児 今は患児のママ

Gさんの子供	Hさん	さん	
8歳	40歳	5歳	35歳
		 むっちり	
Aクリニックにかかっている患児	元患児、発症時期・覚えている服薬的に川崎病かな？ 医療機器エンジニア 実は私がモデル ノンフィクションです	元患児、 言語聴覚士・STとして医療現場で活躍中	

私、Bの机の上には
山積みのカルテと
書類の山…

続・いつか私を、
ここから連れ出して

The Circle of Care ; Legacy of a Pediatric Clinic.



クリニック内に不安が
満ちてきたようです

Y部長、相談が
あります



病児保育システムは
街に大切なものになりました
・・・でも心配・・・



Z看護師長、
どうしたの？

うーん

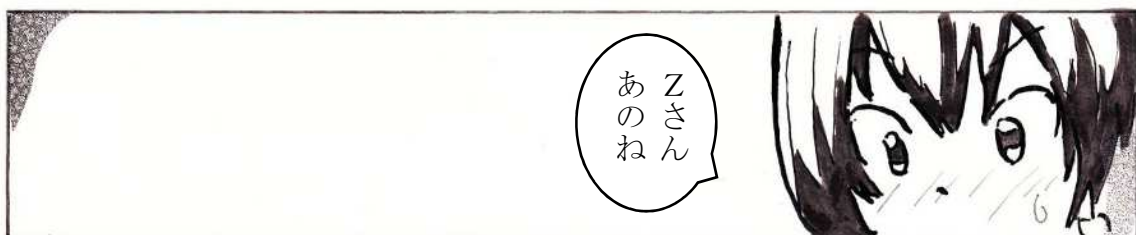


何より承継する後継者が
居ないんですよ



A先生もB先生も高齢で





成長してママになった
Gさんがやってきました



Zさん急患です



分かりました
A先生に声を
かけてください

はい



あらGちゃん じゃない
大きくなったわね



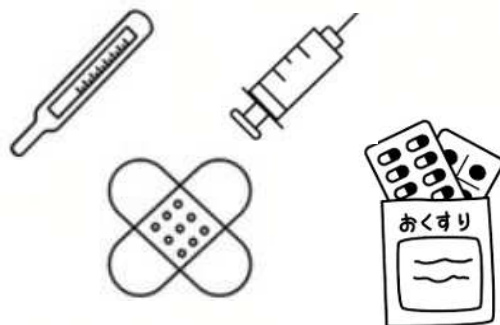
A先生、お久しぶりです

もうお母さんですよ



そうか、私は歳をと
ったけど、みんなは
成長したのね

まー





Hさんだね、医療機器の
説明なんてビツクリだよ

今度はエンジニアになったHさん

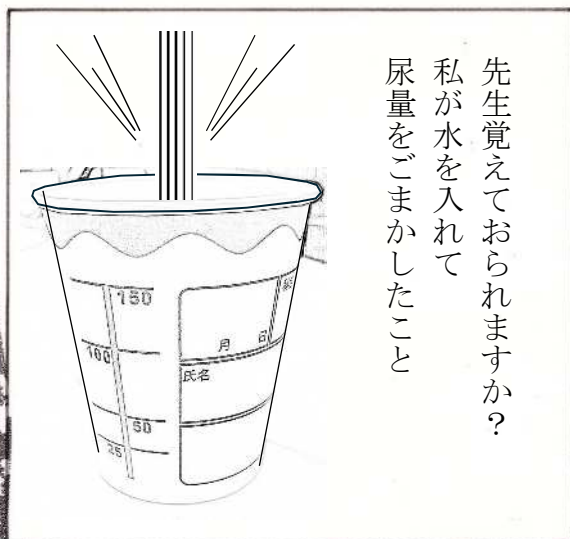
B先生、お元気ですか？



今日は私が開発した商品
を持ってきました

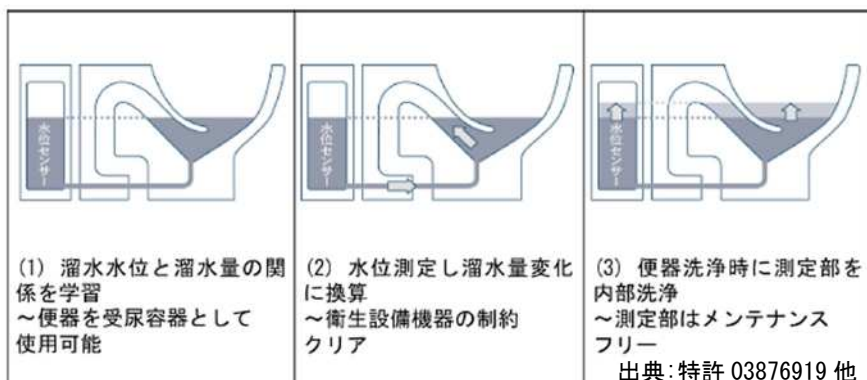
喜ばせたかったんです

私のおしっこが出なくなると、
ママが悲しそうな顔になったんです

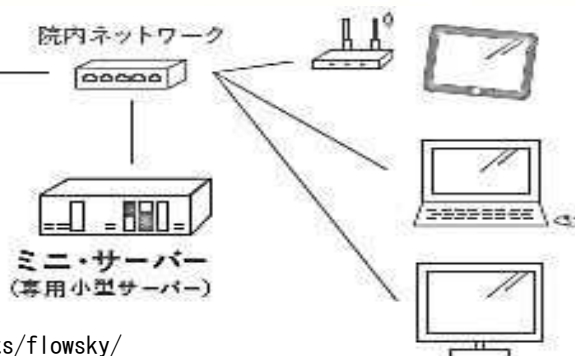


先生覚えておられますか？
私が水を入れて
尿量をごまかしたこと





便器でおしっこするだけで、尿量を測定する機器を作ったんです



自動で排尿日誌も
作ってくれます

出典: <https://jp.toto.com/products/flowsky/>





いつの間にか
支える側だったのね



へー、そうなんだ

患児だと思っていたら...



患児に支えられて
いたんだね



医療を支えていますよ
医師・ナース以外にも仕事はいっぱいです



病児保育室
A
キッズ

Aクリニックが
できて40年



パパやママになつて



子供を連れてきて



Gさんのお子様の付き添い方
凄く良かったですね

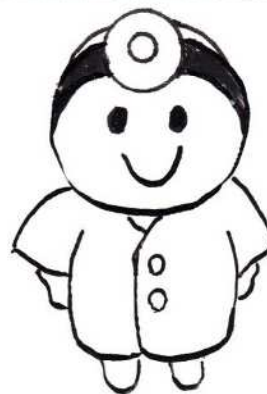
患児経験を生かした医療
機器のエンジニアになつて



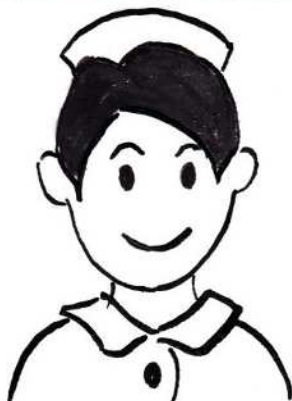
ステキな医療スタッフで
頑張ってくれる方も居て



医者になった患児も
居ましたし



ナースになった患児も
居ましたね



最近、A先生はみんなに誇れる
ことやっていますか？



アルコールが増えているらしい
ですよ
Yさんに、聞いていますよ

だだ…
大丈夫です…







あつ
いつもの
患者さんだ

さあ、クリニック閉めますよ

今日の診療はおしまいです
夜間救急センターにお願いします

あつ、ちよつと遅すぎましたね
先生方によりしくお伝えください

バタバタ



ムスー

体調良いから診れるのに：
でも、休んで明日に備えなきゃ

もう連れ出してもらうのは止めて
患者に向き合うことに徹することでしょう

さあ寝よう、休むぞ



編集後記

本作は、『いつか私を、ここから連れ出して』および『A New Departure at the Station of Hope』の続編として構想したものです。

かつて破綻寸前だった A クリニックは、Y 事務部長の冷徹かつ確かな手腕（システム）によって、今や街に欠かせない病児保育の拠点へと成長を遂げました。しかし、組織の拡大と安定の裏で、「後継者がいない」という医療界全体の切実な存亡の危機に直面します。

作中、かつて「患児」として守られる側だった子供たちが、時の地層を経てそれぞれに異なる立場で社会を支え、新しい時代を迎えつつある姿を描きました。

私自身、医療機器の研究開発の最前線で、名前のない技術者として不条理なシステムと戦い、また自身の交通事故による脳挫傷からのリハビリを経験する中で、「人は不条理な傷を抱えながらも、別の立場で誰かを支える側に回ることができる」という動的な真理を学びました。

身近なハラスメントやストレスが人を摩耗させる現代だからこそ、ただ「誰かに連れ出してもらおう」のを待つのではなく、自らの足で床を踏みしめて次世代へバトンを繋ぐことの尊さを、私の人生の経験値を代謝させて表現いたしました。

今年度で会社は停年ですけれど、私の作った成果は商品だけでなく特許や論文などのエビデンスとして臨床現場で活用され、患児時代に小児科主治医に叩き込まれた信念が結実したように思います。本当に嬉しい限りです。きっと自分にとって大切なのは、自分が学んだことがシステムとして、次世代に繋がるのが本当の成果なのかなと思いました。

資料

山崎洋式; A New Departure at the Station of Hope, 20260420

山崎洋式; いつか私を、ここから連れ出して, 20250407

冬の旅; いつか私を、ここから連れ出して 想い人の SOS, m3, 20241128

山田悠史; 身近な人間関係のストレスが、あなたの「老化」を早めているかもしれないという話, CareNet, 20260319 話, CareNet, 20260319

教えて！川崎病の小児で尿量観察が重要な理由, 日経メディカル, 20260601

高橋修; 碇シンジ育成計画, 角川書店, 20260325

亜桜まる; 制服少女未征服, 少年画報社, 20170930

高橋留美子; 百年の恋, 小学館, 20131016